

島根と山脈

24期 徳田完二

「島根県民の歌」を覚えたのはいつだったのか。学校で習った記憶はないので、たまたまどこかで聞いて覚えたのだろう。たぶん小学校の半ばごろだったのではないかな。何度も聞いたわけではないが、覚えやすいメロディなのですぐに覚えたのだと思う。「おきの島山夢のごと」と、自分が住んでいる 隠岐が歌詞に盛り込まれているのも気に入った。

島根県のホームページによると、この歌は 1951 年（昭和 26 年）にサンフランシスコ講和条約の締結を記念して制定されたものだとのことで、作曲はかの有名な小関裕而、作詞は米山治という人だそうある。「米山治」についてネットで調べてみると、次のことが分かった。

1890 年（明治 23 年）、島根県神門郡杵築町（現在の出雲市大社町）の旧家に生まれ、1907 年（明治 40 年）に京都市立商業実修学校を卒業したあと、三菱 UFJ 銀行の前身である銀行に勤めた銀行マンである（なお、松江中学を卒業した人かどうかはわからなかった）。定年後、島根に帰り、悠々自適の生活を送っていた時、県民歌の募集があったのに応募し、採用された由である。

この歌のタイトルは、一番の歌詞の冒頭にある「薄紫の山脈（やまなみ）」だが、北高の校歌も「さんみゃくうかびて」と「山脈」がキーワードになっている。島根は山脈のイメージと結びつきやすいのだろうか。そうだとすると、それには、「島根県民の歌」の歌詞「磯風清き六十里」にもあるように、東西に細長い地形がかかわっているのかもしれない。松江に住んでいた高校時代にことさら「山脈」を意識した覚えはないが、実家のある隠岐から本土に渡るフェリーは島根から鳥取にまたがって広がる山脈に向かって進むので、晴れて見通しのいい日には「島根県民の歌」の冒頭部分が目の前の現実としてあった。

「島根県民の歌」で検索すると、ネット上には関連する記事や動画がいくつかあった。その中で『島根県民の歌』はもう歌えない？』というのが目に止まった。わたしはこの歌の一番の歌詞しか知らなかったのだが、三番の歌詞に「九十万の県民の」というくだりがあり、これと現実が乖離している、というような話だった。現在、島根県の人口は六十四万人ほどだから（これは大正時代よりも少ない数らしい）、いまの時代に三番を歌うと確かに違和感を覚えざるを得ない。歌が作られた 1951 年（昭和 26 年）は戦後ベビーブームの真っただ中だったおかげで、人口が九十万人を数えたのだろう。それに引き比べて現状を見ると少々寂しい気持ちになる。

「山脈」にからめて、北高校歌にある「出雲富士」についてネットで調べてみた。それは島根半島の枕木山を指す一方、大山も出雲富士と称される、とある。冬の晴天の日、西川津校舎ではグラウンドの遙か彼方に雪をかぶった大山がくっきり見えることがあったので、わたしはずっと「出雲富士」とは大山のことだと思っていた。それはいかにも「仰げば正し出雲富士」にふさわしかった。しかし実際、校歌の「出雲富士」はどちらを指すのだろうか。

蛇足だが、ネットで「出雲富士」を検索すると、ほとんどの記事が地元で作られている日本酒「出雲富士」に関わるものだった。

連載ミニエッセイ 28

大文字

京都の夏の風物詩といえば、なんと言っても、8月16日の夜に行われる五山送り火だろう。これは「大文字」といわれることが多い。五山とは「大文字」「妙法」「舟形」「左大文字」「鳥居形」の五つを言い、この順番に点火されていく。これは東から西へという順になっており、盆に里帰りした祖先の霊を西方浄土に送り返すことを意味するそうである。

大学の同級生に京都市出身の女子学生がいて、よその人（京都以外の人）の中には大文字のことを「大文字焼き」などと言う人がいるが、それはやめてほしい。大文字の送り火と言ってほしいのだ、とクラスの発行物に書いていたことがある。大文字は「山焼き」などではないのである。

初めて大文字を見たのは、大学一年の時だった。当時はおおらかな時代で、私が属していた学部では、大文字を見たい人のために建物の屋上を特別開放してくれるという粋な計らいがあった。今となっては、古き良き時代のエピソードである。その屋上は大文字の火床がある如意ヶ岳に近いので、けっこう迫力があった。暗闇の中で、点火された火が徐々に広がって「大」の字になっていくのを見たとき、屋上に詰めかけていた人たちの口から思わず「おお…」と声が漏れた。

あちらこちらの土地に住んだ後、再び京都に戻ってからは、左大文字の麓に住んでいる。このため、大文字を自宅のすぐ近くで見るようになった。その日、麓の道路には見物人があふれるほど集まる。毎年同じことが繰り返されるだけなのだが、やはり見ないと落ち着かない。このごろでは娘夫婦の住んでいるマンションの屋上から見る。ここは、送り火の日に小さな屋上を住人とその関係者にだけ開放してくれるからである。

如意ヶ岳は銀閣寺の脇にある道からいつでも自由に登れ、京都市内を広く眺め下ろすことができる。これに対して左大文字の方は、登り口が私有地の中にあるため、通常は登れない。ただし、送り火の当日午後と翌日の朝だけは一般の人でも立ち入らせてもらえる。こちらは如意ヶ岳よりだいぶ低いので眺望はそれほどでもない。送り火の翌日に登る人はたいてい、燃え残った消し炭を持ち帰る。消し炭は、魔除け、厄除け、盗難除けのお守りになるとされているためである。

学生時代に聞いた話にこういうのがある。ある年の冬の夜、如意ヶ岳に「大」の文字が突然浮かび上がり、下界の人々を驚かせた。その怪現象の正体は京大生たちのいたずらで、大勢がそれぞれ懐中電灯を持って火床に並び、一斉に点灯したのだった。付近の街では大騒ぎになり、学生たちは警察からも強くお叱りを受けたと聞いた。この話の真偽のほどは明らかでないが、ありそうなことだと思った。この大学には人騒がせな「悪さ」をしておもしろがる学生が今も昔もけっこういるからである。

ところで、五山の送り火を「大文字焼き」と呼んではいけないのは先ほど述べたとおりだが、「大文字焼き」というものが実はある。それは、如意ヶ岳の麓で売っている、あんこの入ったお菓子、大判焼（太鼓焼き）のことである。それが特定の店の商品名なのか、その界限の大判焼きをあらわす一般的名称なのかは知らない。また、昔見たことがあるきりなので、今でも存在するのかどうかは定かではない。